

ちょっと前まで母などから“カレーのお肉は鶏肉でも良い？”と聞かれると“うん”と何も考えずに明るく返事をしていた私が今年の夏、そう簡単に答えられなくなってしまった壮絶な体験をしました。カワヨワークキャンプでの鶏の解体です。あれからもう何日も経っていますが、未だに昨日のここのように感じられます。

前日の夜から本当に嫌で嫌でたまらなくて眠れないほどでした。体験 1 時間前になると、今まで経験したことのないくらいに緊張して手汗をかいてしまいました。鶏小屋についた時、今まで楽しく話をしていた皆も一言も喋らず、空気がとても重くなったような気がしました。

小屋の隅には鶏がいました。鶏と目が合いました。それはとても不安そうな目に見えました。私はなぜかその時不意に涙が出てしまいました。この鶏たちは何を考えているのだろう、自分たちは今から死ぬのかなと思っているのか、殺されちゃうのかなと思っているのか、鶏は人間の言葉を話すことができないので、それを考えると余計に涙が止まりませんでした。

羽をばたつかせる鶏を捕まえなければならないことはわかっているけれど、どこかで解体をする方から見つからないように穴を作って逃がしてあげたいという気持ちもありとても複雑でした。しかし結局羽と足を捕まえられた鶏たちは身動きがとれない状態となってしまいました。私はまたふいに涙が出てしまいました。泣きたくて泣いているわけではないのに溢れ出てきてしまいました。

そのあとのことは、つらくて悲しくて本当は思い出したくありません。最後の最後に鶏の首をいぎ切るときになると少し落ち着いてきたはずだったのに再び怖さと緊張の気持ちがよみがえりました。切るときに目をつぶろうか迷いましたが、鶏たちの為にもしっかりと見ることにしました。切られるとき、鶏は口を開け少し声を出していました。そして目の色を無くし羽をばたつかせ足を広げられるだけ広げ、最後の力を振り絞っているように見えました。私は何も言えませんでした。すごいやかわいそうで片付けられる言葉なんかでは決してなく、その時だけ時間が止まっていたような気がしました。終わった後、首からしたたり落ちる大量の血を抜き終わり、お湯に鶏を入れて羽を自分たちの手で取りました。たった 5 分前は飛び跳ねることのできていた固い羽がすべて柔らかくなっていて取れてしまうことに言葉が出ませんでした。

その夜はその鶏がカレーにでました。もうそれは鶏とは呼べず「鶏肉」という名でしか呼ばれないことに虚しさを感じました。

でもその日ほど心の底から「いただきます」や「ごちそうさまでした」という言葉を言ったことはありません。私達の勝手な都合で命を奪われた鶏の悲しそうな最期の瞬間が頭から離れませんでした。

私達の毎日の食事にはお肉やお魚などは当たり前のように出てきて、今までそれを当たり前のように食べていました。でもあの鶏のように、人間が生きるために犠牲になっている生き物がたくさんいてそして解体をするような方がいらっしゃるということを今回知りました。その方たちや、命を預けてくれた生き物たちに感謝の気持ちを忘れては絶対にいけない、だからこれからは心をこめて「いただきます」や「ごちそうさま」を言いたいし、皆さんにも

そう思っていて欲しいです。

この経験は、私にとって、忘れられない思い出ではなく、忘れたくない、絶対に忘れては  
いけない思い出となりました。